

初めて亜丁を訪れた時から既に三年の月日が流れていた。いつか再び訪れる日を胸に描きつつも、日本でのせわしない日常に追われるうちに月日は過ぎて、記憶の中に沈み込んでしまいそうになっていたこの土地に、思いがけず再びやって来ることができたのだ。

旅の道連れとなったアーロン、シャオチン、ウインの三人と共に、前夜泊まった稲城の温泉から朝まだ暗い3時間の道のりを車を飛ばしてきた私達は、この日亜丁の入り口まで来ていたのだった。

やっぱり違うよね……。出発前の朝食をとっていた小屋の中で、自らポーターをかってでた少年の顔を覗きこみながら私は呟いた。16歳だという彼のまだ幼さの残る可愛らしい顔立ち、どこことなく思い出の亜丁の少年と似ていなくもないが、大人しそうな彼からは、あの時の少年の、人を引き付けるやんちゃな腕白坊主といった雰囲気は感じられなかった。

私はポケットから古びた手帳を取り出した。乗り物の時刻表や地名、旅の途中で出会った人の名前などが走り書きしてある旅行用のメモ帳だ。中国では筆談が欠かせないため、すぐに取り出せる様にいつもズボンのポケットに入れてあった。

その手帳は長い間、旅行用のザックに入れっぱなしになっていた物で、前回亜丁を訪れた時も使っていた。あちこちの土地で無秩序に書き付けられたメモの中には、あの時少年に教えてもらったチベット語の単語がいくつかと、チベット名を中国語の当て字で書いたと思われる、拙い彼の直筆で書かれた名前も残っていたのだ。

私はそのページを開いてポーター少年に見せながら尋ねた。

「ねえ、あなた彼を知らない？ 歳はあなたと同じくらいの筈なんだけどな」

「四郎旺堆……スラウンドゥイ？ 僕も昔スラウンドゥイっていう名前だったことがあるよ」

え？ チベット人は途中で名前が変わったりするの？ 訳が解からなかったがそれについては深く追求せずに行った。

「でも、あなたじゃないなあ……」

するとポーター少年が言った。

「他にもスラウンドゥイって奴がいるから、彼を見つけたら僕が聞いてあげるよ」

どうやらよくある名前のようなのだ。

小屋を出ると朝日がいっぱいに降り注いでいた。湿った土の匂いが香り、木々の緑が朝の光をあびて輝くピカピカの朝だ。やった～！！亜丁だぁ！！とうとうこままでやって来たんだ～！！澄んだ空気を胸いっぱい吸い込んだ。

さあ、行こう！！稲城から一緒にやってきたアーロン、シャオチン、ウインと共に声を上げると元気に歩き出した。ポーター少年は私の大きなザックを背負うと胸を張り、私が持っていた水筒を手にとると「これも僕が持つよ」とやる気満々だ。自分の力でお金を稼ぐ事を誇らしく感じているのか、少年は嬉しそうだった。

小屋の前の道を下るとそこは馬よせになっていて、沢山の馬が柵の中に入れていた。三年前私もここで馬に跨り意気揚々と出発したのだが、貧乏バックパッカーの今回は徒歩である。道には馬を引く馬子達が行列をつくって座っていた。これからやって来る観光客を乗せる順番待ちをしているところなのだろう。こんなに観光客が来るのかぁ……。以前と比べるとなんだかずいぶん活気付いている様子だ。

私のポーター少年が、こちらに背を向けて座っている一人の少年に近づくと、背後から肩を揺すって振り向かせた。

「彼の名前はスラウンドゥイだよ。どう？」

「ううん、違う」私は首を振る。

いきなり振り向きざまに、この子じゃないと首を振られた少年は「なんだよ～！！」と迷惑そうな声をあげた。

仕方ないよね……。あの時から既に三年の月日が経過しているのだ。この土地にすっかり腰を落ち着けている年配者ならいざしらず、彼は成長期の少年だ。

少年の家がある亜丁村には小学校しか無いそうで、三年前のあの時ですら稲城の街の中学校に寄宿して通っていると聞いていた。私達が出会った時はたまたま夏休みで村に帰っていただけなのだろう。あれから三年経って既に高校生の年齢に達しているはずの彼がこの村にとどまっている筈はなかったのだ。今頃はもっと遠い街の学校に通ってるんだろうな……

私にとって亜丁の思い出は、素晴らしい自然の風景もさることながら、なんといっても少年と、二人で訪れた宝石の湖で、その二つは切り離せないよう感じられていた。イメージの中では亜丁にいけば少年にも会えるように思われていたのが、現実的に考えればもう会うことは出来ないだろうと思うとなんだかとっても残念な気持ちだ。

私がそんな感傷に浸っていたその時である。突然がっしりとした背の高い男が近寄ってくると、「そのポーターをいくらで雇ってるんだ!？」と声をかけてきた。新たなポーターの売り込みに来たのかと思い「もう間に合ってるから」と手を振って立ち去ろうとしたが、男は険しい顔つきで執拗に追いかけてくる。「幾らだ? 幾らだ?」と尋ねてくる。

最初は無視していたが、男のしつこさに辟易したアーロンが、もう他のポーターを雇いなおす余地はないんだという意味を込めて「2日間で220元だよ!」と答えた。その金額は先ほどの小屋で少年がポーターに名乗り出た際、幾らで彼を雇えば良いのか判らなかつた私達と少年が、その場に居た村人達に妥当な金額を尋ねた時の彼らの言い値だ。この亜丁自然保護区を二日ばかりで周遊できるトレッキングコースがあるらしく、その間ポーターを雇うならそれくらいの金額だという話が出たのだ。

そんなコースがあるのならばぜひ行って見たいものだが、手持ちの現金が心もとない私にはそのような金額でポーターを雇う余裕など無かつたし、亜丁でどう過ごすかという計画など立てていない。実際には一番近いポイントの沖古寺まで30円で雇っていただけだ。

ところが「彼を二日間雇っているから、もう他のポーターは要らないんだ」と聞いた男は引き下がるところかますます勢いを増し、「そんな金額じゃ駄目だ!!」と私達の行く手をふさぐようにして怒りだしたのだ。「あんたに何の関係があるんだよ!!」いい加減苛立ってきたアーロンが語気を強めて男に尋ねると、男は私のポーターを指差して言った。

「関係あるさ!こいつは俺の弟だ。弟をそんな安く使うなんてこの俺が許さないぜ」

それまで誰も注意を向けていなかったポーター少年に、みんなの目が一斉に向けられた。先ほどまで胸を張りニコニコしていた少年が、顔を赤くして可哀相になる程うな垂れていた。「彼は君のお兄さんなのか?」アーロンが尋ねると少年は小さく頷いた。

事情が飲み込めた私達は、実際に雇っている金額を男に告げると、男はしぶしぶ納得した様子で「30円で沖古寺までだな!それ以上だったら許さねえぞ」と念を押し、やっと立ち去っていった。なんだかみんなグッタリした気分だった。

まったく亜丁の入り口に立ったばかりだということにこれである。気分ぶち壊した。

「何なんだよ!あいつは」アーロンが声をあげた。

「別に俺たちが無理にポーターをやらせた訳じゃないぜ。彼が自分でやりたいって言ったんだ。金額だって俺たちが決めたんじゃない。せっかく綺麗な自然の中に来て、

こんな金の話で揉めるなんて気分が悪いぜ」

みんなも同感だった。アーロンの言葉を聞き、ポーター少年が先ほどの元気とは違って変わって下を向きしょんぼりしているのが可哀相だった。別に彼に非がある訳ではないのだ。

しかし内心一番悲しかったのは私だ。他の三人とはこの土地に対する思い入れが違うのだ。心の中で大切に暖めていた感激の亜丁再訪の旅立ちに、なんでこんな目に合わなきゃならないの!? 爽やかな出発の気分を返してよ~!!ポーター少年の兄だというあの男が恨めしい。時計を巻き戻して振り出しに戻りたい気分だった。

気分は相当悪かつたが、亜丁の風景は懐かしかつた。白濁した川にかかった木の橋、林の中を登る急な坂、チベットの経文が彫り付けられた石をピラミッドのように積み重ねて立てられているマニ塚。次々に記憶の中に残っている風景が現れてくる。

見たところ徒歩で歩いているのは私達だけだった。後からやってくる観光客が続々と馬に跨って私達を追い越していき、前方からも折り返してきた観光客が馬に乗って戻ってくる。馬上で両手を振りながら満面の笑みを浮かべてやってくる人がいると思ったら、理糖から稻城に向かうバスの中で出会った真っ赤なジャージのおじさんだった。この朝まだ開いていない料金所のゲートをこっそり潜り抜けた後にも再会した、あのおじさんだ。私達と同時に亜丁に到着した筈なのにもう戻ってきたのかあ。

私達が亜丁の入り口の小屋でゆっくり朝食を食べたり村の人たちと喋ったりしている間に、馬に乗って洛絨牛場まで往復してきたのだろうか。せっかくここまでやって来たのに、数時間で帰ってしまうなんてもったいないなあ・・・でも普通の観光客はそんなもんなのだろう。楽な移動手段で切り取られたように美しい風景だけを眺めて写真を写し、その場所に行ったという証拠を集めて旅のコレクションにするのだ。

みんなは亜丁の山の上にあんなに美しい宝石の様な湖があることを知っているのだろうか?それが見たくて、この土地が忘れられずに再びやってくる外国人までいるというのに。私のそんな気分も知らずに、おじさんは馬上から両手で私の手をぎゅっと握って握手すると、顔中笑顔にして手を振って去っていった。憎めないおじさんだ。

亜丁の懐かしい風景とおじさんの笑顔で、先程の気分の悪さは徐々にほぐれてきていた。なんといっても私は亜丁に戻ってこれたのだ。ばんざーい!!

(次号に続く)

